

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：57701

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12964

研究課題名（和文）奄美大島南部におけるノロ祭祀継承の現代的展開－神社との相互交渉に注目して－

研究課題名（英文）Contemporary Situation of Succession of Noro Rituals in the Southern part of Amami Oshima: Focusing on the Reciprocal Relationship with Shrines

研究代表者

町 泰樹 (Machi, Taiki)

鹿児島工業高等専門学校・一般教育科・准教授

研究者番号：30725693

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、奄美大島南部のノロ祭祀の継承について、神社との相互交渉を含めた現代的な展開、ならびに、それを可能にするノロ祭祀の担い手であるノロやユタ、地域住民の世界観や宗教認識を明らかにすることである。研究当初は、奄美大島南部の加計呂麻島にてフィールドワークを予定していたが、新型コロナウイルスの流行によって、それは叶わなかった。かわりに、ノロ祭祀等に関する地元新聞紙の記事分析、大島北部の笠利町における神社管理者からの聞き取り調査などを行った。これらの調査から、ノロ祭祀自体は断絶しているものの、祭祀場所や民俗知は地域社会の様々な文脈のなかで断片的に保持されていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、ノロ祭祀やユタといった在地の宗教文化と外来宗教（神社神道）との相互交渉過程における在地側の主体性に着目する。これは近年の研究動向と重なるが、時期として戦前や明治維新期に主たる関心を寄せる従来の研究とは異なり、本研究では現在進行形の問題として宗教文化間の相互交渉過程を論じる点に新規性がある。本研究によって、当初の想定以上にノロ祭祀が断絶していること、他方で、ノロ祭祀の祭場等が地域住民の手によって、ノロ祭祀とは異なる文脈で保存・再建が果たされている事例が存在していること、実態としてのノロ祭祀が途絶えた後でも、それらに関する記憶から神社の管理者が選出される事例が明らかになった。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this research is to examine the modern situation of the succession of Noro rituals in the southern part of Amami Oshima, including mutual negotiations with Shinto shrines, and to clarify the worldview and religious awareness of the Noro, Yuta, and local people who carry out Noro rituals. At the beginning of the research, I was planning to do fieldwork on Kakeroma Island in the southern part of Amami Oshima, but it was not possible due to the epidemic of the new coronavirus. Instead, I analyzed articles in local newspapers about Noro rituals and conducted interviews with shrine administrators in Kasari Town in the northern part of Oshima. From these investigations, it became clear that although Noro rituals themselves were discontinued, ritual sites and folk knowledge were fragmented in various contexts of local communities.

研究分野：宗教人類学

キーワード：ノロ 奄美大島 神社 ユタ 外来宗教 継承

1. 研究開始当初の背景

奄美群島は、琉球にルーツを持つ女性神役(ノロ)による村落祭祀やユタのシャーマニズムといった在地の宗教文化を有する一方で、薩摩藩の侵攻や明治維新といった歴史的背景のもとで神道や仏教が導入され、戦後にはキリスト教(カトリック)や創価学会を始めとした新宗教が本格的な布教運動を開始するなど、豊かな宗教文化を有する地域である。

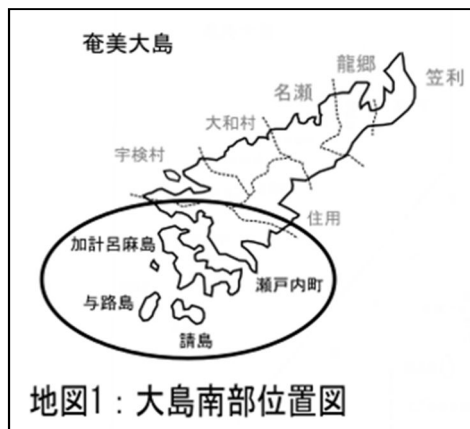
戦後、奄美群島の重層的な宗教文化の研究に先鞭をつけたのは、九学会連合による大規模な奄美調査であった。九学会連合による奄美調査は、1950年代後半と70年後半に二度行われ、宗教学の分野では、50年代の調査ではノロやユタの実態解明に貢献し、70年代には在地の宗教文化に加え、外来宗教の移入の影響をテーマとした調査が行われた。

こうした研究の流れは、静態的な宗教世界の把握から外来宗教の影響という動態的な宗教研究への変化を示しているが、在地の宗教文化は外来宗教の影響を受ける客体としてしか位置づけられてこなかった。また、九学会連合以降の研究は、在地の宗教文化を含め、仏教やキリスト教、新宗教といった個別の宗教を単位に深められたが、その結果、在地の宗教文化と外来宗教との関係性については、未開拓の領域として残されることになった。

研究代表者の町は、以上のような反省と研究の蓄積に立ち、比較的研究が手薄であった奄美大島北部の笠利・龍郷・名瀬地域を中心に、在地の伝承から創建された神社について研究を進めてきた。近代以降に外部から導入された神社神道と、在地の伝統的な宗教文化との相互交渉のあり方を系譜的に辿ることで、在地の宗教文化を神社へと接続し保持しようとする地域社会の主体的な動きや、伝承を神社に結びつける際には、祖先祭祀やユタの助言といった現地社会の宗教的枠組みが用いられていることも明らかになった。

しかしながら、研究期間や予算が限られており、奄美大島南部(加計呂麻島・与路島・請島:地図1参照)の状況については、十分に調査を行っていない。上記の3島は、薩摩藩制時代に代官所が置かれていた奄美大島中部・北部に比べ、ノロ祭祀が保存されており、その一部は現在も継続されている。

大島南部のノロ祭祀については、1970年代から90年代にかけて、ヨーゼフ・クライナーをはじめ多くの研究が行われてきたが(住谷&クライナー 1977)、神社などの外来宗教との相互交渉の過程や、それを可能にした社会的背景、在地の宗教文化の担い手であるノロやユタ、地域住民の世界観や宗教認識の問題については十分に論じられていない。



2. 研究の目的

そこで、本研究の目的を、奄美大島南部のノロ祭祀をめぐる継承の問題について、外来宗教である神社との相互交渉を含めた現代的な展開、ならびに、それを可能にする在地の宗教文化の担い手であるノロやユタ、地域住民の世界観や宗教認識を明らかにすること、とする。継承の問題を扱うのは、それが外来宗教との接続を検討する機会であり、さらにその接続先として神社を対象とするのは、外来宗教のなかでノロ祭祀との親和性が最も高いためである。

本研究は、従来、個別に論じられてきたノロ祭祀と神社について、継承の問題をめぐる両者の相互交渉過程に注目する点に独自性を持つ。これにより、宗教世界を静態的に捉えるあまり閉塞状態にあるノロ祭祀研究には、祭祀継承の現代的展開という新たな展望が開け、神社神道研究には、近代日本の地政学的な周縁部である奄美群島の事例によって、国家神道論とは異なる切り口を提示しうるだろう。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を達成するために、大島南部のノロ祭祀に関する概略調査(2019年度~2020年度)、継承のタイプ別重点調査(2021年度)、ノロ祭祀の継承に関する比較研究(2022年度)を研究テーマとして設定する(表1参照)。研究方法はフィールドワークと文献研究を採用し、下記のように年度後との成果目標を設定して調査・研究を行う。

・2019年度(初年度): 旧実久村地域のノロ祭祀概略調査

本研究の調査対象地である大島南部は、旧実久村地域(加計呂間島東側)と旧鎮西村地域(加計呂間島西側と請島・与路島)に分かれている。研究初年度は、旧実久村地域の14集落を対象に、ノロ祭祀の継承状況に関する聞き取り調査および祭祀場の巡検を行う。

限られた研究期間ですべての集落のインテンシブな調査は不可能であるため、この段階の調

査では、最低限の調査項目に絞った調査にとどめ、ノロ祭祀の現状を概略的に把握することに重点を置く。また、次年度に予定している旧鎮西村地域の方が集落数が多いため、可能な限り調査を前倒して進めていく。

・2020年度(2年目)：旧鎮西村地域のノロ祭祀概略調査

旧鎮西村地域の18集落を対象に、初年度と同様の概略的な調査を行う。

授業期間など、フィールドに行けない期間については、聞き取り資料の文字起しをはじめとした調査資料の整理や、聞き取り中に出てきた歴史的な事柄(台風などの自然災害や集落の開発など)に関する郷土誌類や地元新聞紙の記事からの裏付けを進める。

次年度からは集落を限定して重点調査を実施する予定であるが、そのために調査対象となる集落の選定を進める。

・2021年度(3年目)：継承のタイプ別重点調査

これまでの概略的な調査で得られた資料をもとに、不継承を含めた継承のあり方を類型化する。類型について、現時点では、ノロ祭祀の「継承」のほかに、ノロ祭祀の担い手がユタの役割を果たす「ユタ化」、ノロ祭祀が神社に接続される「神社化」、その下位分類として既存の神社への「合祀」や新たな神社の「創建」、継承が失敗した「断絶」を想定している。

重点調査では、各類型を示す代表的な集落を選定した上で、継承のあり方に影響を与えたであろう歴史的な事象(災害や村落の開発)、社会的な背景(人口の流出や観光化)、ノロたちのファミリーヒストリーやライフヒストリー、ノロ祭祀に対する集落民の関与について綿密な聞き取りを行う。

・2022年(最終年度)：ノロ祭祀の継承に関する比較研究

重点調査の結果をもとに、類型間の比較研究を行い、ノロ祭祀の継承を規定する要因を明らかにすることで、最終的な調査のまとめとし、成果発表を行なう。ただし、必要に応じて追加調査を行う。

表1. 年度ごとの研究計画

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
研究テーマ	旧実久村地域のノロ祭祀概略調査	旧鎮西村地域のノロ祭祀概略調査	継承のタイプ別重点調査	ノロ祭祀の継承に関する比較研究

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

2019年度は、先行研究の整理として、松原武実・高橋一郎『加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧実久村編)』(1998)および松原武実『加計呂麻島ノロ祭祀調査報告(旧鎮西村編)』(1998)をもとに、加計呂麻島の各集落における1990年代後半におけるノロ祭祀の継承状況について整理を行った。その後、夏季休業期間を利用して、旧実久村地域のフィールドワークを実施した。当初の予定では、2019年度で旧実久村地域の全集落のフィールドワークを行う予定であったが、以下の事情から全集落のフィールドワークは実施していない。第一に、先行研究を整理するなかで、当初の見込み以上にノロ祭祀が断絶している状況が明らかになった。そのため、全集落のフィールドワークを実施するよりも、継承の可能性が高い集落のフィールドワークを優先することにした。第二に、西安室集落において、ノロ祭祀の継承はずでに断絶しているながらも、集落の有志によってアシャゲが再建された事例を知り、その調査を優先させたためである。本事例についてアシャゲ再建の背景を明らかにし、また、似たような事例が他の集落においてもみられないかを調査することで、ノロ祭祀に関わる場所や記憶、知識が、宗教的な文脈を超えて文化資源として活用されている実態を明らかにできると見込んでいる。

当初の計画では、2020年度は前年度までの調査結果をもとにノロ祭祀の継承をいくつかタイプ分けし、それらのタイプを最もよく表している集落の事例について重点調査を実施する予定であった。しかし、前年度に、当初の見込み以上にノロ祭祀が断絶している状況が明らかとなったため、今年度は加計呂麻島西 安室集落におけるアシャゲの再建について研究を進める予定であった。しかしながら、新型コロナウイルスの感染拡大によって、2020年度は現地調査が全くできなかった。そのため、2020年度の現地調査は断念し、既存研究の収集・整理、およびもとも計画していた地元新聞紙の収集を行った。とはいえ、前期中は勤務先の遠隔授業等の対応に追われ、こうした研究手法の転換を検討できたのが夏休み期間に入ってからであったため、既存研究については収集したままで、十分な整理・分析ができていない状況である。また、地元新聞紙については、鹿児島市内にある鹿児島県立図書館本館にて過去の記事をマイクロフィルム等で閲覧しているが、奄美分館でしか閲覧できない発行年の記事もあり、こちらについても十分に

進んでいるとは言えない状況である。とはいえ、既存研究の収集と整理は必須の課題であるため、継続し、次年度以降は体系的なレビューを行っていきたい。地元新聞紙の収集については、県立図書館所蔵分をまずは閲覧し、現地調査が可能になった時に奄美分館所蔵分を収集していく。新型コロナウイルスの感染状況に応じてではあるが、現地調査実施の可能性も常に検討しておきたいと考えている。

2021年度は、2020年度までの研究手法の変更（インタビュー等をメインにした現地調査から地元新聞紙の記事収集を中心としたドキュメント・リサーチへ）を踏まえ、継続して新聞記事の収集を行った。研究手法の変更に伴って、ノロ祭祀の継承に関して、ノロ本人やノロの子孫の立場から記述するのではなく、ノロ祭祀が新聞記事という社会的な文脈においてどのように捉えられているのか、という現地社会のノロ祭祀へのまなざしにスポットを当てることとした。収集した新聞記事は、新聞社1社の昭和30年代分である。この時期は、ノロ祭祀そのものが取り上げられた記事はほとんどなかった。わずかにあったノロやノロ祭祀に係る記事としては、地元の郷土研究グループによってノロの祭祀具（衣装や扇）が発見されたという記事がほとんどであった。また、奄美大島の歴史を若者に語る連載企画においては、ノロ祭祀がユタの活動とあわせて非合理的な陋習と位置づけられていた。このように、昭和30年代の時点で、すでにノロ祭祀の多くは断絶して久しい、歴史的な「過去」もしくは「遺物」として扱われていることが読み取れた。

2022年度には、次第にwithコロナの社会状況に変化してきたが、大島南部の加計呂麻島は医療資源が限られており、高齢の住民も多いことから、本研究で本来迫りたい対象であったが、調査地域から外すこととした。それに加えて、これまで未調査であった大和村と宇検村の神社や小祠の巡検調査を行なった。大和村では、サトウキビの苗や黒糖製造技術を日本に伝えたと言われる直川智（すなおかわち）翁を祀る開饒（ひらとみ）神社があり、郷土史類にも資料が比較的まとまっている。本研究期間中にはまとめきれなかったが、研究期間終了後に、偉人崇拜からの神社創建の事例として検討していきたい。また、奄美大島北部にて神社を管理している男性にインタビューを行い、神社の管理を担うようになった経緯について聞き取り調査を行なった。男性によると、神社の管理を担うようになったのは、男性の遠縁にあたる前任者から、高齢を理由に引き継ぐよう依頼されたためであった。その際、前任者が男性を適任としたのには理由があり、男性の母親はユタであり、父方祖母がノロであったため、神社の管理という「神ごと」を担うのに適していると判断されたそうである。ノロやユタはほとんどが断絶している状況にあるが、ノロやユタをめぐる民俗知は集落内で共有されており、それが神社の管理者を決める際に活用されている事例と位置付けられる。ところで、男性は神社を管理するようになってから、前任者があげていなかった祝詞をあげ、これまで祭礼時に用いられていた線香を廃止している。線香に関しては、神仏分離以前の神仏混淆の名残と考えられるが、こうした要素が管理者の「熱心さ」によって「神道化」している様子がうかがえた。同時に、こうした神道化の背景に、地域内で共有されてきたであろう民俗知の弱体化も感じられた。こうした地域内での民俗知の競合については、今後も研究を深めるべきテーマであると考えている。研究期間中がコロナ禍であったこともあり、なかなか神社等を管理している人々から聞き取り調査ができなかったが、最後に今後の研究につながる事例にたどり着くことができた。

(2)得られた成果の国内外における位置付けとインパクト

本研究では、ノロ祭祀やユタといった在地の宗教文化と外来宗教（神社神道）との相互交渉過程における在地側の主体性に着目するが、こうした本研究の研究関心は、明治期以降の神社政策を地域レベルの神社神道の受容過程から検証する近年の国家神道研究（畔上 2009）や、国民国家論や宗教概念論の成果を応用しながら奄美・沖縄社会の宗教変容を理解する研究（及川 2016）といった近年の研究動向と重なっている。

しかしながら、時期として戦前や明治維新时期に主たる関心を寄せる従来の研究とは異なり、本研究では現在進行形の問題として宗教文化間の相互交渉過程を論じる点に新規性がある。本研究によって、当初の想定以上にノロ祭祀が断絶していること、他方で、ノロ祭祀の祭場等が地域住民の手によって、ノロ祭祀とは異なる文脈で保存・再建が果たされている事例が存在していること、実態としてのノロ祭祀が途絶えた後でも、それらに関する記憶から神社の管理者が選出される事例が明らかになった。

(3)今後の展望

本研究では、コロナ禍によって本来予定していた奄美大島南部の加計呂麻島での現地調査は十分に果たせなかった。しかしながら、アシャゲの再建という大変興味深い事例の見当もついたため、この点については今後の研究で取り上げていきたい。

また、本研究では、ノロ祭祀が断絶しつつある状況でも、それに関連した施設や場所は、文化財や観光資源等の文脈で保存・継承がなされていることをうかがうことができた。また、地域の神社の管理者を選出する理由の一つにノロやユタの記憶が反映されていることも明らかとなった。ノロに関連する場所については、ユタ等の霊能者によってさらに異なる意味づけがなされていくことも予想される。ノロやユタの記憶についても、集落内の民俗知や神社に関する知識や近

代的な合理主義的思考等と競合する状況にあり、こうした複数の知が競合する文脈で民俗知や地域内の宗教知を捉えていくことは、今後追求していくべき課題であると考えている。

【参考文献】

- 畔上直樹 2009 『「村の鎮守」と戦前日本 「国家神道」の地域社会史』有志社。
及川高 2016 『「宗教」と「無宗教」の近代南島史 国民国家・学知・民衆』森話社。
住谷一彦 & クライナー, ヨーゼフ 1977 『南西諸島の神観念』未来社。
松原武実 1998 『加計呂麻島ノ口祭祀調査報告(旧鎮西村編)』南日本文化研究所。
松原武実・高橋一郎 1998 『加計呂麻島ノ口祭祀調査報告(旧実久村編)』南日本文化研究所。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 清水香基・李賢京・町泰樹・田島忠篤	4. 巻 44
2. 論文標題 奄美大島創価学会と社会移動に関する一考察 アンケート調査の結果から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 南島文化	6. 最初と最後の頁 23-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 町泰樹
2. 発表標題 境界領域における国民化の諸相 明治期の与論島における民俗宗教の変容
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同シンポジウム「日本をめぐる北方史と南方史の対話」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 町泰樹
2. 発表標題 奄美群島の民俗宗教に関する覚書 奄美大島南部のノ口祭祀調査に向けて
3. 学会等名 鹿児島哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 町泰樹
2. 発表標題 奄美大島の須野巖島神社について
3. 学会等名 西日本宗教学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------